

タマネギ「べと病」発病株の抜き取りと薬剤防除を徹底してください！

平成28年の春期に、県南部を中心にタマネギべと病による被害が多く見られました。そのため、土壌中にはべと病の伝染源が平年より多く存在していると考えられます。すでにべと病菌に感染した株は、温かくなるにつれて発病して全身感染症状（図1）を呈し、春先の強力な伝染源となります。圃場をよく観察し、全身感染症状の株は見つけ次第速やかに抜き取り処分を徹底し、べと病を効率的に防除しましょう。また、二次伝染が生じる3月以降の薬剤防除を徹底しましょう。

（防除上の参考事項）

- （1）べと病菌は、秋期に苗床や定植後の苗に感染し、冬期間に株全体に病原菌がまん延し、感染株は2月以降に全身感染症状を呈する。症状としては、葉の光沢が無くなり、生育が悪くなり、葉が湾曲する（図1）。全身感染株は薬剤散布しても回復しない。
- （2）気温が上昇して多湿の条件となると、全身に白色ないし暗紫色の粉状のカビが生じ、これが二次伝染源となって、急速な蔓延の原因となる。
- （3）本病は、気温15℃前後で雨が多いと盛んに二次伝染が起こる。そのため、3月以降に雨が多いと多発生になることが多い。
- （4）付近にあるネギ、ワケギのべと病発症株からも伝染するため除去を徹底する。
- （5）薬剤防除は予防的に実施し、二次感染（図2）の始まる3月以降に徹底して行う。



図1. タマネギべと病の全身感染株



図2. 二次感染株の初期症状